

日本語学習者による外来語使用の実態とアクセント習得に関する考察  
 —— 英語・中国語・韓国語話者の会話データに基づいて ——\*

戸田 貴子

要 旨

本稿では、ACTFL-OPI (American Council of Teaching Foreign Languages-Oral Proficiency Interview, 以下 OPI) の手法を用いた会話形式の録音データを用いて、日本語学習者による外来語名詞使用の実態とアクセント習得のプロセスについて調査した。被調査者は英語・中国語・韓国語を母語とする3学習者群、レベルは初級・中級・上級・超級の4レベルである。音声資料で使われた外来語(2235語)をデータベース化し、分析した。

本調査の結果、初級レベルでは外来語使用数が少なく、中級レベルでその数が増加し、上級・超級では非用へと向かう傾向が示唆された。アクセントについては、日本語話者による外来語アクセント原則とは異なる規則を使用するが、母語に関わらず全ての学習者に次のような傾向が見られるということが明らかになった。1) 0型の習得順序が最も遅く、-2型及び-3型の習得は0型に先行する。2) -2型の過剰使用が見られる。3) 第一原則とされる-3型の正答率は-2型より低い。最後にアクセントとモーラタイミングの習得の関係を調べたところ、英語話者は特にアクセントに関する誤用が多く、中国語・韓国語話者にはモーラに関する誤用が多いという傾向があることが分かった。

[キーワード] : 外来語, アクセント習得, 過剰使用, 非用, 平板化

1. はじめに

外国人日本語学習者によるアクセント習得のプロセスには、目標言語である日本語とも学習者の母語とも異なった独自のシステムが形成されるということが言われている。この中間言語におけるストラテジーは日本人方言話者が東京語アクセントを生成しようとする際に使用するストラテジーと同一であるとい

う点が指摘されている(山田1994ab, 1995)。しかし、先行研究は英語を母語とする上級日本語学習者に限られており、母語や日本語レベルの異なる学習者のアクセント習得のプロセスについては報告されていない。そこで本研究では、OPIの手法を用いて収集された会話形式の録音データ(鎌田一山内コーパス、以下KYコーパス)に基づいて、外来語名詞の使用の実態とアクセント習得について調査した。被験者はOPIの評価基準に従って初級・中級・上級・超級の4レベルと判定された英語・中国語・韓国語話者の3学習者群である。ここでいう外来語とはカタカナ表記のもので、そのほとんどが英語起源の外来語である(玉村1991)。

外来語における日本語化規則の習得研究によると、日本語学習者はカッケンブッシュ・大曾(1990)に記述されている分節素に関する音韻規則に類似した中間言語規則に基づいて外来語化を行っていることが分かっている(小林他1991)。また、日本語学習者には開音節化規則の過剰一般化が見られることが指摘されている(Quackenbush and Toda 1992)。日本人話者による外来語アクセントの産出には数々の音韻規則が関わっており(秋永1981;1985)、音声的要因も影響を与えると指摘されてきた(佐藤1993)。日本語学習者も外来語の習得過程においてこれに近い規則を作り上げていくのであろうか。

会話の録音データを用いてアクセントの習得について調査する際に問題となるのは、学習者がどこまでを一単位と捉えているかによってアウトプットのアクセントが異なるということである。その単位は単語や名詞句である場合も、文全体ということもあり得る。同一学習者でもその捉え方には可変性があり、何をひとまとまりとしているのか特定できない場合もあろう。このような問題のため、単語リストによるデータを使うことも考えられるが、日本語教育的観点からは、単語レベルのアクセントの正確さだけでなく、自然な会話の中で日本語の韻律的特徴がどのように習得されるかということに興味を持たれる。このような会話データを扱う限り、韻律的特徴の分析には統語、談話、パラ言語等、数多くの要因が関わってくるため、慎重に方法論を検討しなければならない。

このような点を踏まえた上で、最終目標は日本語アクセントの習得過程を調査することであるが、今回は比較的独立性が高く、年々その数が増えていることから日本語教育において重要であると考えられる外来語を調査の対象とし、1)会話の中でそれがどのように使用されているか記述し、2)アクセント型とその習得順序、3)拍とアクセントの関係について考察する。

## 2. KY コーパスについて

KY コーパスは OPI 資格を持つ試験官と、OPI 試験官養成ワークショップ受講者が行ったインタビュー形式のデータである。自然な会話の流れの中で試験官と日本語学習者が自由会話を行ったもので、今回の調査では、90人の日本語学習者の録音データ（1人あたり最長30分）及び文字化資料を用いた。

OPI では評価者が複数でも評価基準が一定であるため、初級・中級・上級・超級という4レベルの横断的データが習得過程を反映すると考えられる。評価基準は ACTFL Proficiency Guidelines（米国外国語教育学会による外国語能力基準）という客観的基準に基づいており、初級・中級・上級・超級という4大区分と、上・中・下の3種類の下位区分がある。テスター間で「上」か「中」、または「中」か「下」のレベルの誤差があった場合は許されるが、「上」か「下」のレベルであるという誤差が生じた場合は、その能力判定が信頼性のないものとしてテストがやり直される。

日本語習得研究において、被調査者となる日本語学習者の日本語能力は初級・中級・上級等の名称や日本語学習年数で示されることが多いが、それが実際の日本語能力を反映していない場合も多い。それは、各日本語教育機関によってレベルの設定の仕方が異なるし、同機関内でも学習者の所属する日本語コースのレベル分けは、その年度の予算や学習者数に影響されるのが現状だからである。また、学習時間数や学習方法によって学習者の日本語能力には大きな違いがでることが予想されるため、学習年数が多いからという理由で、その学習者の日本語のレベルが他の学習者と比較して高いとは一概には言えない。このようなことから、現在の日本語習得研究において基盤とすべき学習者の日本語レベルの規定は、きわめて恣意的である場合が多いと言わざるを得ない。このため、学習者言語のコーパスを構築し、そのデータを用いて日本語習得研究の各分野（音声・音韻論的研究・統語・形態論的研究・談話分析・社会言語学的研究）において調査を行うこととなった（鎌田1999）。本研究はこのコーパスを用いた音声・音韻習得研究の一部である。

## 3. 被調査者

被調査者の母語は英語(E)、中国語(C)、韓国語(K)である。各学習者群30名、それぞれ初級(N)5名、中級(I)10名、上級(A)10名、超級(S)5名の音声データ及び文

字化資料（計90名）を用いた<sup>(1)</sup>。

#### 4. 調査方法

1. KY コーパスを用いて、カタカナ表記による外来語リストを作成し、会話を録音した音声資料から編集テープを作成した。
2. 1.を用いて、外来語データベースを作成した（以下、KY 外来語データベース<sup>(2)</sup>）。データベースには母語、OPI による日本語レベル、外来語表記、アクセント型正答、モーラ数正答、学習者によるアクセント型、同モーラ数、日本人評価者による5段階評価、評価者のコメントを入力した<sup>(3)</sup>。
3. アクセント核の位置は0型、-2型、-3型等で示した。学習者によるアクセント型、モーラ数は、筆者が音声記述し、KY 外来語データベースに入力した<sup>(4)</sup>。

#### 5. 結果と考察

##### 5.1. 外来語使用の実態

##### 5.1.1. 外来語使用のべ語数／異なり語数

今回の分析対象は、KY コーパスで使用された外来語2235語で、英語話者が954語、韓国語話者が720語、中国語話者が561語である。学習者群間の使用のべ語数の比較をするために、固有名詞は調査の対象にしなかったが、外来語使用頻度は予想通り英語話者が最も多かった。一方、中国語話者によるのべ語数は、英語話者の60%以下、韓国語話者の80%以下と最も少なかった。英語話者に外来語の使用が頻繁に見られるのは、やはり母語の影響であろう<sup>(5)</sup>。しかし、母語だけでなく、学習者の第二・第三言語が外来語使用数に影響を与えている例も見られた<sup>(6)</sup>。

全学習者間において、初級レベルの学習者の外来語使用のべ語数は最も少なかった（表1）。初級学習者は文法的にも語彙的にも日本語で話せることが限られており発話量も少ないため、語彙の不足を補うための外来語使用は最小限にとどめられている。一方、中級レベルに至った学習者の外来語使用数は、初級レベルと比べて大きく伸びていることが分かった。特に中級レベルの英語話者には会話継続の手段として、原語に近い発音をむしろ積極的に使う学習者が

多く見られた。例えば、「英語では、そのことはサツタイア」、「英語ではモダンアート」、「シリアスは日本語で?」、「食堂はカフェテリア?」等のように、補足したり、言い換えたり、知らない単語を聞いたりすることが出来るようになっていく。このように英語話者は初級から中級レベルになるに従って、会話継続の手段として外来語を使用する傾向が増加する一方、上級・超級レベルにおける外来語使用のべ語数は初級から中級への増加に比例して増えるのではなく、ほぼ同様にとどまるか減少するということが分かった。

次に、異なり語数を見てみると、同様の傾向があるということが分かる(表2)。中国語話者の外来語異なり語数は英語話者の62%、韓国語話者の81%と最も少なく、この傾向は上の外来語のべ語数に類似している。全学習者群で初級から中級レベルにかけて、異なり語数も伸び率が最大であり、上級・超級レベルになると、ほぼ同じにとどまっている。

このようなインタビュー形式のデータにおける外来語の使用頻度は、発話速度やポーズの回数、試験官による発話時間等、様々な要因によって影響される。しかし、上・超級では中級より流暢さが増し発話量も多いため、会話時間に対する外来語使用頻度は、中級レベルで大きく伸びるが、その後語彙力の向上に従って和語の使用が増えると言えるであろう<sup>(7)</sup>。つまり、初級レベルでは外来語の使用頻度は少なく、中級レベルでいったん増加し、その後は非用へと向かう可能性が示唆される結果となった。

表1 学習者一人あたりの外来語使用数(のべ語数)

	英語話者	中国語話者	韓国語話者
初級 (N)	13.4	7.2	7.6
中級 (I)	41.1	20.9	30.7
上級 (A)	32.5	23.5	24.1
超級 (S)	30.2	16.2	27.6

表2 学習者一人あたりの外来語使用数(異なり語数)

	英語話者	中国語話者	韓国語話者
初級 (N)	8.0	4.4	4.6
中級 (I)	21.5	11.3	15.3
上級 (A)	20.5	15.6	15.9
超級 (S)	20.2	11.6	19.0

### 5.1.2. 原語的発音

KY コーパスには、学習者が原語に近い発音を使用した単語が88語あった。その中には日本語としてまだ定着していない単語や、聞き手側の英語知識がかなり豊富でなければ理解できないであろうと思われる単語もあった。このようなデータは、モーラ数及びアクセント型を記述することが不可能であるため、本調査では5.2.の分析からは除外した。ここでは、簡潔に原語的発音の傾向について述べておく。

原語に近い発音の使用頻度が最も高かったのは、やはり英語話者で、全レベルを通しての使用総数は74語であった(中国語話者、韓国語話者ともに7語のみ)。下の例のように音節数の多い単語が特に目立つが、長い単語だけではなくIBMやDNAのような略語も原語発音となる場合が多かった。また、[θ] [ð] [f]等の日本語に存在しない音を持つ単語にも英語の発音が使われ、さらに特定の語彙の使用される環境が母語環境である場合(例:母国での大学の履修科目等)にも表れやすいという特徴があった。日本語学習者による原語発音例は次の通りである。

英語話者: ヘルシー, トライアスロン, クオリティーコントロール, ソーシャルスタディー, モダンヒストリー, サイエンスフィクション, モダンアート, ファーストネーム, エキサイティング, ウォータースキー, ウェイトトレーニング, IBM, DNA, NTT, OPI等

中国語話者: ハイクラス, トロピカル, フォーマルウエア等

韓国語話者: ボイリング, ケミストリー, ショートプログラム等

英語話者による原語的発音のべ語数をレベル別に見ると、EN(3), EI(34), EA(35), ES(2)<sup>(8)</sup>となり、初級レベルでは限られた範囲で既習外来語だけを使うのに対して、中級・上級レベルでは未習語彙を原語で発音しても会話を継続していこうとする傾向があることが分かった。会話継続を達成するための

コミュニケーション・ストラテジーと言えるであろう。また語彙力が向上するに従って、外来語の使用頻度の低下とともに超級レベルでは英語発音の回避及び外来語の非用に移行する傾向が見られた。

## 5.2. 外来語アクセントの習得

### 5.2.1. 日本語における外来語アクセントの形成

文化庁 (1971) によると、外来語名詞のアクセントには次の3規則があげられている。

1. -3型が第一原則である。
2. 導入されてから時間が経っており、使用頻度の高い単語は平板型アクセントを持つものが多い。
3. 第一原則に従わないアクセントは原語に近いアクセントを持つ。

また、秋永 (1981; 1985) による外来語名詞のアクセント規則は次の通りである<sup>9)</sup>。

1. 2拍語は原則として頭高、3拍語も頭高が原則だが語末が長音である単語は原語のアクセントを残す傾向にあり、4拍以上の単語は-3型が原則である。
2. 古く導入された単語や、使用頻度の高い単語は平板型アクセントを持つものが多い。
3. 新しく導入された単語は原語に近いアクセントを持つ。

また、上の3規則の他、複合語のアクセントについても次のように述べられている。

4. 複合名詞の第2要素が平板または頭高型の場合は第2要素の第1拍目にアクセント核があり、中高型の場合は第2要素のアクセント核のある位置まで高い。

一方、佐藤 (1993) はまだ発話されていない単語の語尾から3番目に話者がアクセントを置くことを想定しピッチ制御を行っているという仮説に疑問を持ち、語音配列が外来語アクセントを決定する重要な要因であると考えた。4拍語では、次の語音配列的要因がアクセントに影響を与えるとしている。

1. 偶数番目の音節位置に、モーラ音素 (長音, 促音, 撥音) がある場合には頭高になりやすい (または偶数番目の音節が無声化されているか, /s/等の独立性の弱い音節がある場合)
2. 「ス」に無声破裂音が後続する時は第2拍目にアクセントが置かれやす

い。

3. 原語の語頭に子音連続 (/pl/, /bl/, /tr/, /dr/等)があり, 外来語の2拍目がラ行音である場合も第2拍目にアクセントが置かれやすい。
4. 語末が/a/または/o/である語は平板型になりやすい。

このように, 先行研究では日本人話者による外来語アクセントの形成に数々の要因が関わっていることが指摘されている。

### 5.2.2. 日本語学習者による外来語アクセントの習得 (2・3拍)

まず, モーラ数が2, 3拍の短い単語から見ると, 日本語におけるアクセント規則では頭高型になる外来語名詞が多いが, 学習者の場合は母語に関わらず次のような傾向があった。

1. 2拍語のアクセントの習得は3拍語の習得に先行する。  
(例: バス, ドア)
2. 3拍語のアクセントの習得は-2型アクセントの過剰使用の影響を受ける。

3拍語では中高型が加わり, アクセント型が2拍語より多いため, 1. は予測される結果である。2. については, 次のことが言える。まず, 初級レベルにおいては英語話者と中国語話者の3拍語のアクセントに問題があるが, 中級以上では問題が少なくなっている(図1, 図2)。次に, 3拍語の中高型の正答率は高いが, 逆に-3型, すなわち頭高型アクセントを持つ外来語を-2型で発音する誤用が3拍語の正答率を低くしているということが分かった。-2型アクセントの過剰使用は, 英語話者と中国語話者の場合, 初級レベルを中心に見られる傾向であり, 中級レベル以上では見られなくなるのに対し, 韓国語話者に関しては中・上級レベルに至るまで続き, 超級レベルでこの傾向がなくなるという結果になった(図3)。そのため, 韓国語話者の正答率は全レベルにおいて低く, 特に3拍語の正答率は上級レベルに至るまで平均80.9%で, 誤答率が約20%ある。母語干渉の観点から中高型アクセントの誤用が多く見られるとも考えられるが, KYコーパスを用いた調査では, 頭高型アクセントを中高型アクセントで置き換える傾向は特定の母語集団だけではなく, 全学習者群に見られるということが分かった。日本語アクセント習得の実態を把握するためには, 今後さらに母語転移に関する調査を行うとともに, 母語干渉の枠組みを超えた調査も必要となるであろう<sup>(10)</sup>。

上で述べたように-2型アクセントの過剰使用は中高型の正答率を高くする

が、その他のアクセント型の正答率を低くすることにもなる。このような例は英語話者(15)、韓国語話者(16)、中国語話者(9)と、計40語あった。逆に、-2型を-3型で置き換えることにより起こった誤用を検索してみると、全学習者中このような誤用は一例も見られないことが分かった。2, 3拍語では頭高型アクセントが原則なので、3拍語で中高型アクセントの外来語は少ないが、語音配列の影響で、第1拍目の母音が無声化する場合(例:スキー, スコア, シチュー等)及び語頭に子音連続が見られる場合には(例:ブルー, プレイ等)中高型になる。しかし、このような例の頭高による誤用は見当たらなかった。つまり学習者による外来語アクセントの形成においては、頭高型が中高型になることは多いが、中高型アクセントを持つ語が頭高型アクセントで発音されることはまれであるということである。

## 2・3拍語のアクセント正答率

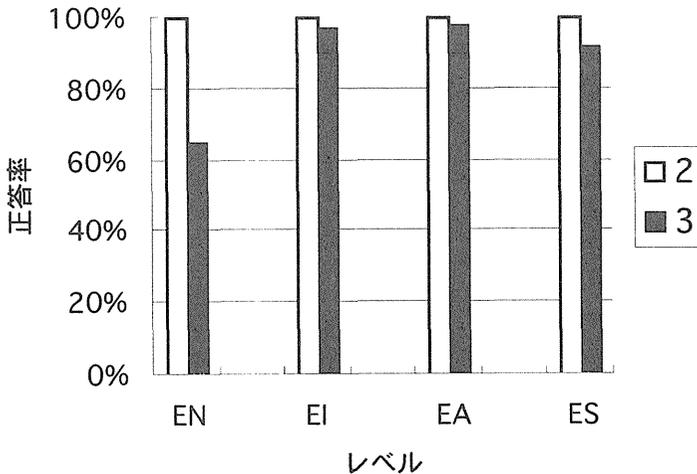


図1 英語話者による外来語アクセント

2・3拍語のアクセント正答率

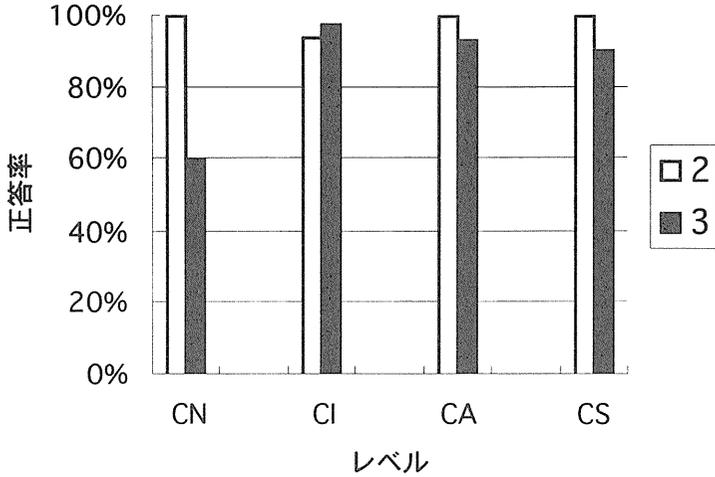


図2 中国語話者による外来語アクセント

2・3拍語のアクセント正答率

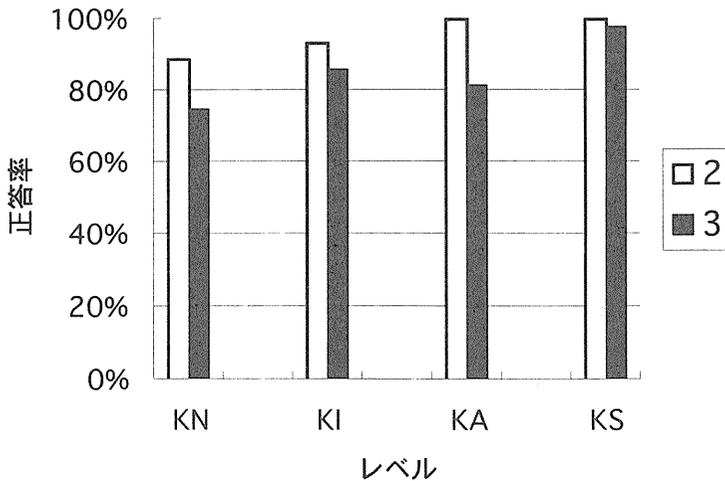


図3 韓国語話者による外来語アクセント

### 5.2.3. 日本語学習者による外来語アクセントの習得（4拍以上）

次に4拍以上の語について述べたい。ここでは、母語別に0型、-2型、-3型、-4型の習得について考察する。

まず、学習者の母語に関わらず、平板型の正答率が全学習者間で最も低いということが言える(図4)。特に中国語話者の平板型アクセントの正答率は40%と低い。この結果は平板型アクセントの習得順序が-2型、-3型と比べて遅れていることを示している。

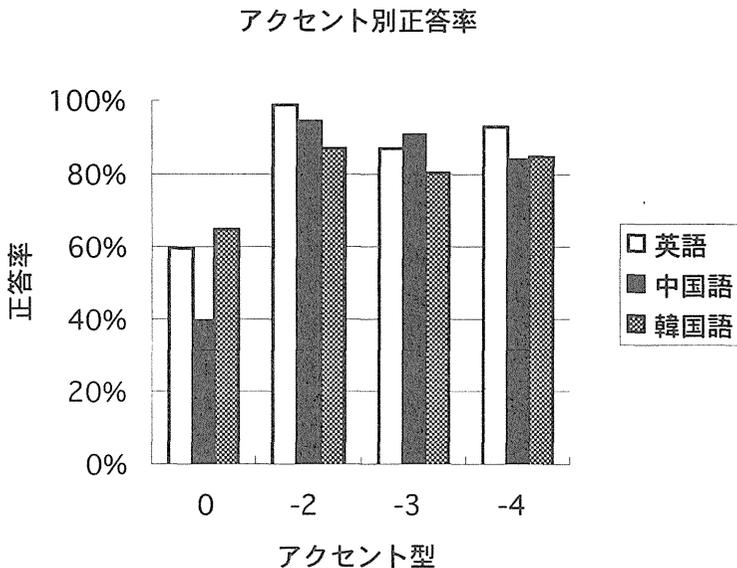


図4 アクセント型別正答率

しかし、上でも述べたように、正答率だけでは習得状況が把握できない理由の一つに過剰使用による誤用がある。つまり、ある特定のアクセント型を過剰使用することにより、正答率が高くなっているという可能性があるため、正答率からだけでは学習者とそのアクセント型を習得したかどうかは分からない。そこで、誤用の傾向についても調べるため、KY コーパスにおける各アクセント型の使用のべ数に対する過剰使用による誤用数（例えば-2型以外のアクセント型が-2型で置き換えられた誤用の数）から過剰使用頻度を出し、その偏りを10段階で示すと次のようになった。

表3 アクセント別過剰使用による誤用の傾向(母語別)

	英語話者	中国語話者	韓国語話者
0型	4	4	9
-2型	10	9	8
-3型	1	1	1
-4型	1	2	2

この結果、過剰使用頻度にはアクセント型による偏りがあることが分かった。過剰使用による誤用は-2型と0型に集中しており、-3型と-4型では少ない。全学習者群について-2型の正答率が高いと同時に、-2型ではない外来語に対しても-2型を使用することから、過剰使用による誤用も多いということが分かった。英語話者による4拍語名詞の-2型アクセントについては堀口(1973)が述べている通りだが、今回の調査では、外来語においては中国語話者・韓国人学習者についても同様の傾向があるということが分かった。

これに対して、0型に関しては全学習者群において正答率が低い半面、0型ではない外来語のアクセントを平板化する例が全学習者群において見られた。この傾向が特に目立ったのは韓国語話者である。平板型の過剰使用頻度が他のアクセント型と比較して最も高いにも関わらず、正答率は40%である。平板化された単語は次の例のように日本語に定着しているものが多かった。

頭高→平板 ハンサム, トースト, ビジネス, シンボル

中高→平板 アパート, ステーキ, スポーツ, トラック

日本人話者による外来語の平板化が指摘されている中(最上1987)、日本語学習者にも同様の傾向が見られるということは大変興味深い。最近の東京語アクセントの調査では、和語を含む4拍語名詞中62.9%が平板型であるということが報告されており(相澤1996)、学習者が和語のアクセントにも影響されて平板型を「日本語らしい」アクセントと解釈することが平板型以外のアクセントを持つ外来語を平板化させた原因の一つであろうと考えられる<sup>(11)</sup>。また、話者に親しみのある外来語のアクセントが平板化するということから、日本人話者に近いストラテジーを用いていると言えるであろう(例:チーム名の「ヴェルディー」)。日本語アクセントの平板化については、初級学習者4名

(ニュージーランド人2名, アメリカ人1名, デンマーク人1名)の縦断的調査でも報告されている(長友他1993)。

日本語における外来語アクセント形成の原則と言われる-3型については、語末から第3拍目にアクセント核のある外来語は多く存在するため全学習者群において使用頻度は最も高いが、正答率は-2型より低いということが分かった。これらのことから、日本語学習者は日本人話者とは異なる規則を形成する可能性が示唆される。

上の結果は、学習者による外来語名詞アクセントの習得のプロセスが次のような特徴を持っていることを示している。

1. 0型の正答率は低く、平板化による誤用が多い。従って、0型の習得順序は遅く、-2型や-3型の習得は0型に先行するであろう。
2. -2型の正答率は-3型より高いが、-2型の過剰使用による誤用が多い。このため学習者による外来語名詞アクセントは-2型が無標であると考えられることができる。
3. -3型の正答率は-2型より低く、過剰使用も見られなかった。このことから、日本語においては-3型が外来語アクセント原則であるが、このアクセント型が学習者によって先に習得され、過剰一般化される可能性は低い。

## 6. 外来語アクセントとモーラタイミングの習得

最後に、外来語アクセントとモーラタイミングとの関係について見ていきたい。

資料1はKY外来語データベースを用いて、長音・撥音・促音を含む外来語の正答・誤答数を検索した結果である。特殊拍の音節配置は第二拍目で、アクセント型に関する誤答、モーラ数に関する誤答(モーラ数が実際より少ない場合も、多い場合も誤答とした)、その両方が関わっている誤答について調べた。資料1をもとに、各被験者群について正答率と、誤用に見られる各項目の割合を調べた結果が表4である。

表4 特殊音節（語頭）のアクセント・モーラ数正答率及び誤答率（%）

		正答率	ア誤答	モ誤答	ア・モ誤答
長音	英語話者	90	56	38	6
	中国語話者	73	27	70	3
	韓国語話者	71	8	68	24
撥音	英語話者	83	77	15	8
	中国語話者	63	55	28	17
	韓国語話者	52	36	36	28
促音	英語話者	91	20	80	0
	中国語話者	86	33	67	0
	韓国語話者	79	25	75	0

この結果から、分かったことは次の通りである。

- 1) 長音に関しては、英語話者は正答率が高いが、誤用はアクセントに関するものが多い。これに対して、中国語・韓国語話者にはモーラに関する誤用の割合が大きい。
- 2) 撥音も、英語話者にはアクセント誤用が多いが、中国語・韓国語話者はアクセント、モーラの誤用ともに多い。
- 3) 促音に関しては、全学習者群にモーラ誤用が多く、アクセント誤用の割合が少ない。

まとめると、英語話者は他の学習者と比較してアクセントに関する誤用が多く、中国語・韓国語話者にはアクセントの誤用もあるが、モーラに関する誤用が目立つということになる。促音に関しては、全学習者群を通して促音の脱落というモーラタイミングの問題が多かった。

英語話者の長音産出については、母語転移により単語中のアクセントが置かれた音節の持続時間が長くなる傾向が見られ、アクセントの音節配置が正しければ聴覚印象ではモーラ数も正答と見なされる場合が多かったが、アクセントの位置が異なる場合、誤答が多かった。これに対して、中国語・韓国語話者の場合はアクセント核の位置が正しくても、聴覚印象では長音が脱落しているように聞こえる例が少なくなかった。下に例をいくつか挙げておく。

CIM001 パティ、パッテ（パーティー）

- CA002 ボリング (ボーリング)  
 CA003 ニュス (ニュース)  
 KNL002 ジュス (ジュース)  
 KIL001 モル (モール)  
 KIM001 ジンズ (ジーンズ), ルルプレー (ロールプレイ)  
 KIM004 スパ (スーパー)  
 KIM005 カド (カード), パマ (パーマ)  
 KIH002 ルル (ルール), ゲム (ゲーム)  
 KA003 バベキュ (バーベキュー)  
 KAH003 ミティング (ミーティング)

また、第二拍目の撥音のピッチが第一拍目と同じで、持続時間が短い場合、撥音の脱落として知覚される例があった。

- CNM002 ピボン (ピンボン)  
 KA003 パス (パンツ)  
 KA003 コピュタ (コンピュータ)  
 KA001 キャセル (キャンセル)

本稿では詳しく説明しなかったが、データベースに入力された日本人話者のコメント欄には、上のように、特殊拍が脱落している単語については「意味不明」「わからない」とのコメントが多く、情報の伝達にも支障が生じることが分かる。本調査の結果は、音声指導においてアクセント型の習得は長短の弁別を強化することにもつながる(水谷1990)、また、ピッチの変動についての認識を学習者に持たせることが大切である(鮎沢1991)という見解とその必要性を支持する結果となった。

## 7. まとめと今後の課題

本調査では外来語習得段階における特徴として次のことが明らかになった。

外来語使用頻度は初級から中級にかけて大きく伸び、上級・超級レベルでは同様に留まるか、逆に少なくなる。この結果は、中級では外来語を会話継続手段として用いるが、日本語のレベルがさらに高くなると、外来語を出来るだけ使用せず、和語を使って会話を継続しようとする傾向があることを示唆している。

アクセントに関しては、外来語形成において原則である-3型の習得が-2

型の過剰使用により影響を受け、正答率も低いことが明らかになった。本調査の結果、学習者言語のアクセントは、日本語における外来語アクセントの原則とは異なる規則を形成することが分かったが、母語に関係なく、全ての学習者に同様の傾向が観察されたことは大変興味深い。このことは、母語転移という視点からは説明できない第二言語学習者に共通したプロセスが存在する可能性を示唆している。

また、アクセントとモーラタイミングの習得について調べたところ、英語話者にはアクセントに関する誤用が多く、中国語・韓国語話者にはモーラに関する誤用が多いということが分かった。

今後の課題は、KY コーパスを用いて和語のアクセントの習得についても調査することである。また、今回特殊拍は第2拍目について調べたが、他の語音配列の場合に関しても調査を行いたい。

#### 参考文献

- 相澤正夫 (1996) 「尾高アクセントの現在位置—『東京語アクセント資料』の分析—」『言語学林1995-1996』三省堂 p683-695
- 秋永一枝 (1981) 「東京アクセントの習得法則」金田一春彦監修『明解日本語アクセント辞典』第二版
- (1985) 「共通語のアクセント」『日本語発音アクセント辞典』改訂新版 日本放送出版協会 p82-83
- 鮎沢孝子・楊立明・磯村一弘・西沼行博・小高京子 (1997) 「北京語母語話者による東京語アクセントの知覚」『21世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」平成8年度研究成果報告書 p13-22
- あらかわそおべえ (1977) 『角川外来語辞典 第二版』角川書店
- 石田敏子 (1991) 「フランス語話者の日本語習得過程」『日本語教育』75号 p64-77
- 李明姫 (1998) 「日本語学習者のアクセントテスト (和語, 外来語, 漢語) の結果について」第22回東京音言言語研究会発表論文
- 李明姫・鮎沢孝子・金世連 (1997) 「韓国語母語話者の「東京アクセントの聞き取りテスト」の結果分析」『21世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」平成8年度研究成果報告書 p23-30
- 稲垣滋子 (1991) 「外来語表記の基準と慣用」『日本語教育』74号 p60-72
- 植田栄子 (1995) 「タイ語母語話者の日本語アクセントの知覚と生成の特徴—効果的な韻律教育に向けて」『平成7年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 p103-108
- NHK 編 (1985) 『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』日本放送出版協会
- 遠藤織枝 (1989) 「外来語の表記」『講座日本語と日本語教育 8 文字・表記の教育』

明治書院

- 大西晴彦 (1977) 「タイ人のアクセントに関する若干の考察」『国際学友会日本語学校紀要』2号 p24-44
- (1990) 「韓国人の日本語のアクセントについて」『国際学友会日本語学校紀要』15号 p52-60
- カッケンブッシュ寛子・大曾美恵子 (1990) 『外来語の形成とその教育』国立国語研究所
- 鎌田 修 (1999) 「KY コーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』文部省科学研究費基盤研究(A)(1)平成11年度研究成果報告書 p227-237
- 窪菌晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』くろしお出版
- 小林ミナ・カッケンブッシュ寛子・深田敦 (1991) 「外来語にみられる日本語化規則の習得—英語話者の調査に基づいて」『日本語教育』74号 p48-59
- 佐藤大和 (1993) 「外来語を材料としたアクセントの検討—構造とリズムに着目して—」『日本語音声と日本語教育』文部省重点領域研究「日本語音声」平成4年度研究成果報告書 p5-18
- 佐藤友則 (1995) 「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育』5 国際交流基金日本語国際センター p139-154
- 助川泰彦 (1993) 「インドネシア人日本語学習者のアクセントにおける特殊拍の影響」『D1班研究発表論集』文部省重点領域研究「日本語音声」平成4年度研究成果報告書 p167-176
- 柴田 武 (1994) 「外来語におけるアクセント核の位置」佐藤喜代治編『現代語・方言の研究』明治書院 p1-31
- 杉藤美代子 (1990) 「日本語と英語のアクセントとイントネーション」『講座日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻(下)』明治書院
- 玉村文郎 (1991) 「日本語における外来要素と外来語」『日本語教育』74号 p13-27
- 土岐 哲 (1982) 「アクセント」日本語教育学会編『日本語教育事典』P26-43 大修館
- 戸田貴子 (1997a) 「初級日本語学習者による特殊拍生成のストラテジー」『第二言語としての日本語の習得研究』凡人社 p157-197
- (1997b) 「モーラリズム習得におけるストラテジーと日本語音声の指導」『平成9年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会 p191-196
- (1998) 「モーラと中間言語の音節構造」『日本語教育論集』第13号筑波大学 p23-45
- 戸田貴子・カッケンブッシュ寛子 (1999) 「中間言語における外来語アクセントの形成と日本人話者による評価」『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』文部省科学研究費基盤研究(A)(1)平成11年度研究成果報告書 p279-296
- 長友和彦・法貴則子・初鹿野阿れ (1993) 「縦断的第2言語習得研究：初級日本語学習者の中間言語」『平成5年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 p149-159
- ネウストプニー J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館

- 文化庁 (1971) 「外来語の名詞」 日本語教育指導参考書 1 『音声と音声教育』 p110-112
- (1976) 「ことば」 シリーズ 4 『外来語』 大蔵省印刷局
- 堀口純子 (1973) 「英語国民による日本の四音節名詞のアクセントの予測とその実際」 『日本語教育』 19号 p97-112
- 牧野成一 (1991) 「ACTFLの外国語能力基準」 『世界の日本語教育』 1 国際交流基金日本語国際センター p15-32
- 水谷 修 (1990) 「アクセントとイントネーションの習得法」 『講座日本語と日本語教育 3 日本語の音声・音韻 (下)』 明治書院 p92-112
- 関光準 (1990) 「日本語と朝鮮語のアクセントとイントネーション」 『講座日本語と日本語教育 3 日本語の音声・音韻 (下)』 明治書院 p303-331
- 最上勝也 (1987) 「平らになる外来語アクセント」 『放送研究と調査』 37 日本放送出版協会 p36-41
- 山田伸子 (1994 a) 「日本語アクセント習得の一段階—外国人学習者の場合—」 『日本語教育』 83号 p108-120
- (1994 b) 「日本語アクセントのストラテジーと中間言語の形成—外国人学習者の場合—」 『音声学会会報』 207号 p17-24
- (1995) 「日本語初級学習者のアクセントと中間言語について」 『平成7年度日本語教育学会春季大会予稿集』 p25-30
- Corder, S.P. (1981) *Error Analysis and Interlanguage*, Oxford University Press.
- Dulay, Burt & Krashen (1982) *Language Two*, Oxford University Press.
- Ellis, R. (1985) *Understanding Second Language Acquisition*, Oxford University Press.
- Ioup, G. (1984) 'Is there a structural foreign accent? A comparison of syntactic errors in second language acquisition', *Language Learning* 34, p 1-18
- Ioup, G. & S.H. Weinberger eds. (1987) *Interlanguage Phonology. The Acquisition of Second Language Sound Systems*, Newbury House, Rowley, Mass.
- Magen, H. S. & S.E. Blumstein (1993) "Effects of speaking rate on the vowel length distinction in Korean" *Journal of Phonetics* 21, p 387-409
- Major, R. (1987) "The model for interlanguage phonology" In G. Ioup & S.H. Weinberger eds., p 101-124
- Munro, J. M. & M. T. Derwing (1995) 'Foreign accent, comprehensibility, and intelligibility in the speech of second language learners', *Language Learning* 45, p 73-97
- Quackenbush, H.C. & T. Toda (1992) "English loan-words in Japanese - Acquisition of phonological rules by Australian students", Paper presented at the *Second Language Acquisition Forum of the Pacific 92*, Sydney University
- (1997) "Perception of foreign words and strategies for creating loan-words in Japanese: An analysis based on some experimental data of

- English, Chinese and Korean speakers” *Proceedings of the Tenth National Conference of Japanese Studies Association of Australia*
- Rose, P. & T. Toda (1994) “A typology of tone sandhi rules in Northern Wu”, *Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics*, p 267-273
- Toda, T. (1994) “Interlanguage phonology : Acquisition of timing control in Japanese”, *Australian Review of Applied Linguistics*, Applied Linguistics Association of Australia, 17/2, p 51-76

## 注

\*本研究は平成9-11年度基盤研究(A)(1)「第二言語としての日本語の習得に関する総合研究」(課題番号08308019・研究代表者・カッケンブッシュ寛子)による研究の一部である。

- (1) 学生の母語及び日本語レベルは次のように表わす。英語話者(E), 中国語話者(C), 韓国語話者(K), 初級(N), 中級(1), 上級(A), 超級(S), 上(H), 中(M), 下(L)。例えば, KIH001は韓国人中級学習者の上(1)である。
- (2) 使用ソフトはクラリスファイルメーカー Pro Version 3.0である。
- (3) 評価については, 戸田・カッケンブッシュ(1999)を参照されたい。
- (4) 筆者の知覚印象に基づき, アクセント正誤はアクセント核の位置, モーラ数正誤は単語中の拍数を基準に分析した。外来語音声及びその表記のゆれは大きく, そのゆれの傾向には日本語音韻との関連性があることが報告されているが(遠藤1989), 本調査ではアクセント, モーラ数に関して複数の可能性が認められる場合は全てを正答として分析した。また, 助川(1993)ではインドネシア人学習者による日本語の基底形アクセントの習得を調べるために, あえて単語リスト読みデータを用いて「極端に丁寧な発音(p169)」がアクセント表記通りに行えるかどうかを調査の対象としたが, 本研究では自然な発音におけるアクセントを調べることにしたため, 第一モーラと第二モーラ間にピッチの変化が知覚されなくても, 自然な発音であれば正答とした。
- (5) 現代日本語における外来語の原語は英語が80.8%, フランス語が5.6%, ドイツ語が3.3%, イタリア語が1.5%, オランダ語が1.3%の順であると報告されている(玉村1991)。カタカナ表記の外来語には英語起源のものが圧倒的に多いため, 英語を母語とする学習者の外来語の使用頻度が高いと考えられる。
- (6) KY コーパスでは, オーストラリアに留学した経験のある中国人学生が他の初級中国語話者の3倍以上の外来語を使用し, 原語に近い発音をする例が見られた(CNH002)。
- (7) 本調査では, のべ語数を基準に分析を行った。日本語習得過程における学習者の発音は可変性を伴うため(Corder 1981), 同一被験者が同じ語を発音した場合でもアクセントが異なる場合があり, 異なり語数の分析ではこのような学習者の発音の特徴が把握できない。(例: ENH001アパート, EIL002アパート, ENH002スポーツが同一被験者によって0型と-3型の両方で発音されている。)

- (8) 中国語話者については、CN(4), CI(3), CA(0), CS(0), 韓国語話者はKN(1), KI(0), KA(5), KS(1)と、英語話者に比べて少ない。
- (9) 秋永(1981)は「外国語に親しい人のアクセントには原語に近いアクセントが使われる傾向がある」としている。この場合は日本人話者の第一言語における第二言語からの転移を指しているが、第二言語と第三言語間にも言語転移が存在する。(6)のように、KYコーパスではオーストラリアに留学していた中国語話者が英語の影響で、外来語を他の中国語話者と比較して3倍以上使用している例がある。
- (10) 各言語における韻律的特徴については本稿では詳しく説明出来ないが、杉藤(1990), 関(1990)等を参照されたい。
- (11) この結果は、助川(1993)に記されている水谷修氏のコメントと一致する。「韓国人学習者がある程度会話が上手になると、日本語のほとんどの語を平板に発音し始める場合がよくあるそうである。(p171)」

## 資料1 長音・撥音・促音（第二拍目）を含む外来語の正答・誤答数

（ア誤：アクセント型の誤答，モ誤：モーラ数の誤答，ア・モ誤：両方に関わる誤答）

## 長音/R/

英語話者		総数	正答	ア誤	モ誤	ア・モ誤
1)	○R○	108	104	4	0	0
2)	○R○○	22	19	1	2	0
3)	○R○○○	18	14	3	1	0
4)	○R○○○○	20	15	1	3	1
	合計	168	152	9	6	1
中国語話者						
1)	○R○	70	54	7	9	0
2)	○R○○	34	22	1	11	0
3)	○R○○○	19	14	1	3	1
4)	○R○○○○	1	1	0	0	0
	合計	124	91	9	23	1
韓国語話者						
1)	○R○	77	62	1	12	2
2)	○R○○	28	15	2	10	1
3)	○R○○○	15	11	0	3	1
4)	○R○○○○	8	3	0	0	5
	合計	128	91	3	25	9

## 撥音/N/

英語話者		総数	正答	ア誤	モ誤	ア・モ誤
1)	○N○	26	23	1	2	0
2)	○N○○	11	10	0	0	1
3)	○N○○○	20	13	7	0	0
4)	○N○○○○	18	16	2	0	0
	合計	75	62	10	2	1
中国語話者						
1)	○N○	11	8	0	1	2
2)	○N○○	20	9	10	0	1
3)	○N○○○	14	10	0	4	0
4)	○N○○○○	3	3	0	0	0
	合計	48	30	10	5	3
韓国語話者						
1)	○N○	9	6	0	0	3
2)	○N○○	22	8	9	4	1
3)	○N○○○	18	11	0	4	3
4)	○N○○○○	3	2	0	1	0
	合計	52	27	9	9	7

## 促音/Q/

英語話者		総数	正答	ア誤	モ誤	ア・モ誤
1)	○Q○	30	30	0	0	0
2)	○Q○○	21	18	0	3	0
3)	○Q○○○	4	2	1	1	0
4)	○Q○○○○	1	1	0	0	0
	合計	56	51	1	4	0
中国語話者						
1)	○Q○	12	11	0	1	0
2)	○Q○○	4	4	0	0	0
3)	○Q○○○	4	2	1	1	0
4)	○Q○○○○	2	2	0	0	0
	合計	22	19	1	2	0
韓国語話者						
1)	○Q○	15	13	0	2	0
2)	○Q○○	16	14	0	2	0
3)	○Q○○○	3	3	0	0	0
4)	○Q○○○○	5	1	2	2	0
	合計	39	31	2	6	0